あの手紙の中で集まろう

佐藤弘 Sato Hiroshi

…それで、これは最初で最後の手紙になる。頼みたいのは読み終わったこれらの文章を全てデータ化すること。そして打ち終わったらこの手紙を破り捨ててほしい。データにするのは大事に保存してほしいからじゃなくて、その逆、この極めて個人的な文章を、僕の汚い手書き文字の上に残るだろう薄気味悪いなにかを抹殺してほしいからだよ。

だからさ、僕はそっちからずっと逃げてきたんだけれども、今日はまだ誰も起きていない朝早い時間に一人で外に出た。太陽は出ていない、けれど空が白けてきて、それなのにどこにも影はできていなくて全部が同じ色に染まっていて、色鉛筆で薄く塗りつぶしたみたいに淡く粗い粒子を身にまとっていた。遠くに見える山岳のでっぱり部分が太陽を遮ってくれているおかげで、この土地だけ遅く起きるのを許してくれているみたいだった。息を吸うと粒子が肺に入り、身体が冷やされていくと体温までも外気と一緒になった気がした。血液の赤色が次第にくすんでいく。皮膚が変色していく。内からじわりじわりと侵食され、僕は風景と区別がつかなくなる。透明人間になった気分だ。僕までも色鉛筆で塗りつぶされて掻き消され、目玉だけが空中に浮いて挙動不審にしている。ぼんやりとした薄明かりの中をひっそりと歩き、秘め事を抱えているみたいでどきどきする。空気はとても冷たい。世界が一番きれいで神秘的な時間。ほんの短い時間。昨日の夜に着いた初めての街はしんと静まり返り、僕はまだ誰にも知られていない。僕もこの土地を全く知らない。空気が新鮮に思える。それはなんて心地良いんだろう。

太陽が現れるまでの間、誰も僕を見つけられない。でも、もう僕はこの心地良さの奥にある哀しさには気付いてしまっている。鼻をツンとさせるその感覚がどこか懐かしく思える。ぎゅっと抱きしめたいような、けれど一体なにを掴めばいいのか見当もつかず焦れったい。試しに両方の手のひらを各々固く握りしめてみると、なにか言葉を発したいような気分にさせられるのだが口からはなにも出てこなかった。勝手に、小さく開いた口から小刻みに吐息がこぼれた。二酸化炭素以外にも取り返しのつかないなにかが出ていってしまったような気がする。取り戻そうと今度は必死に息を吸う。ハッ、スッ、ハッ、スッ。呼び戻すための、振り向かせるためのなにか言葉。けれど、もう声に出すべき言葉を持ち合わせてはいないようだ。僕は二つの相反する気持ちを同時に持っていた。それは、もし僕がなにか声を発した時に誰も気づいてくれなかったらどうしたらいいのだろうという恐怖心と、どんな大声を発したとしても誰も僕に気付きやしないのだという安心感だった。そのせめぎ合いの中で言葉は押しつぶされていく。その狭間に僕はいる。いる？　いない？　チカチカ、ピカピカ。点いたり消えたりしている。笑ったり泣いたりしている。その寂しさを捕まえられずに目的もなく歩いていたら、僕は逃げてきたそっち側にいた時に感じたものとこれは同じ気持ちなんだってことに気付いた。でも、どうしてこんなに清々しいのかは分からない。逃げる必要はもうないし、逃げ場所もどこにもない。今、僕は石ころを握っている。さっき歩いていた時に拾ったものだ。丸くて、すべすべしていて、黒い石。なぜかこの石を持ち帰りたくなった。握っていると心が落ち着いてくるのと同時に、歩きながら感じていたあの静かな胸騒ぎが甦ってくる。僕は、この小石を何度も握りしめながら、永遠に確認し終えることはないだろう。

手紙に同封した石がそれだ。もしかすると、お前は偶然石を握りながらこの手紙を読んでいるのかもしれないね。または、なにげなく机の上に放っておいて後回しにしようとしたそれを、まさにたった今、その石を眺めているのかもしれない。お前は僕と同じ気持ちになっているだろうか。なっているとしても、それは僕の気持ちがその石に乗り移ったからじゃないよ。最初から、僕とお前の心はその石に拘束されていた。お前とそっちで頻繁に顔を合わせていたずっと前からだ。表面が黒いからうっすらと自分の顔が映っているだろうね。なあ、今、お前はどんな顔をしてる？　僕にはそれが見えるようだよ。「お前」とは「僕」のことだ。今日は日曜日。どうして日曜日の朝って早く起きてしまうんだろう。小学校のある平日は起きるのが辛いのに、日曜日だと自然に起きられる。お父さんは今日も出勤で、玄関のドアから出ていく音をベッドの中で聞いた。お母さんはまだ寝ている。僕は居間の

パソコンを一人で使っている。窓の外から朝の涼しい空気が入ってきます。お母さんが起きて朝ご飯を作ってくれるまで、僕は外に出てあの手紙にあった黒い石に似た石でも探しに行こうかな。そうしよう。でも別に石でなくてもいいんだと思う。なにか僕にそう思わせるようなモノ。拾って持って帰りたくなるようなモノ。起こさないようにひっそりと仕度をしよう。お父さんのようにうるさくドアを閉めずに、そっと家から出て行こう。逃げよう逃げよう。僕は逃げる。「僕」とは「僕」のことだ。さっき彼女と別れたのも逃げるために違いない。完全に煮詰まっていた。でも、煮詰まるってどういうことだ。お互いに妥協できないなにかがあって八方塞がりの状態なら、そんなものは簡単に突破できそうなものなのに。だって煮詰まっていると客観的に分かっているならば、我を通す意味がないじゃないか。僕という個人はそんなに正しくない。たとえ正しくとも、その正しさはたいしたものじゃない。そう思ってまた会いに行ってみた。彼女はドアを開けてくれた。まるでさっきの別れ話なんかなかったみたいだった。彼女はコップにペットボトルのお茶を入れてテーブルに置いた。僕はテーブルに置かれたお茶に手を出さなかった。僕らは互いに顔を見合せなかった。ああうんざりする。でも、僕らは続けるしかなかった。どちらもなにも喋らない。外から鈴虫の音が聞こえてくる。

「電気消していい？」

彼女はなにも言わなかった。僕は勝手に電気を消してさっきとは違うところに座った。部屋は真っ暗で彼女の顔が見えない。それだけのことで僕はほっとした。彼女も鈴虫の音色に耳を澄ませている。

「僕は君が好きだよ」

彼女は無言のままだ。

「僕は君が好き。結局、僕にはそれだけでいい気がする。そして、君もそれだけでいいんだ本当は。僕らはもうお互いに大事なものを持っているって分かっているのに、どうしてそれを持ち続けることができないんだろう。余計な奴らが文句をつける。関係ない話ばかりする。僕は閉じこもる気はない。悪いけれど、君とずっと一緒にいるつもりもない」

「じゃあ別れる」

「ちょっと待って。どうしてそう簡単に別れるなんて言えるの？」

「さっき別れようって言ったのはそっちでしょ」

「じゃあ間違えたんだよ。僕らは一緒にいなければならない。いやそうじゃなくて、僕らは奇跡的に一緒にいられるってことだよ。電気を消して部屋を真っ暗にしよう。お互いの顔は見えない。ただ鈴虫の音色に耳を傾けながら、僕は同じようにしている君を感じる。そう思えるのはなんてすごいことなんだろう」

「わたしにはあなたが必要なの。でも、あなたがいると息が詰まる。いてほしいのにいてほしくない。これは、一体、ねえ、どうすればいいの？」

外を車が走り去った。

鈴虫の音が止んだ。

僕はなにも喋らなかった。

彼女も同じだった。

だんだんと聞こえてくる心臓の音が妙に気になる。彼女にも自分の心臓の音が聞こえているんだろう。僕は心臓の音なんて聞きたくなかった。僕の意識は窓の外の鈴虫に集中していればそれでよかった。内になんて秘めていたくはないし、早く出て行ってしまえばいい。なにかにうっとりとするというのは、その分だけ自分が奪い去られていることだ。僕の意識は点在して、僕もいつの間にかその点の一つになっている。そうなればいい。ああ、なんだか手紙に書いてあったことが分かったみたいだよ。ねえ、今、僕はそこにいるだろうか。

僕の名前を呼ぶ君の声で僕はまた一つになった。まるで魔法のようだね。

「いる？」

「いるよ」

「なにか喋って」

「喋りたくない」

続きは本誌で！